

センター専門助手着任のご挨拶 As the Assistant Research Officer and Special Librarian

床 井 啓太郎
TOKOI Keitaro

2007年10月1日付で、社会科学古典資料センターの専門助手に着任いたしました。

私は学生時代を地方の大学で過ごしたため、一橋大学や、古典資料センターと日常的に関わりがあったわけではありませんが、フランス史を研究対象としていた関係で、院生時代に何度か附属図書館や古典資料センターを訪問した記憶があります。当時は、附属図書館の入口は現在と違った方向にもあったように思いますが、センターは現在とほとんど変わらない姿で建っていました。目録から抜き書きしたリストを職員の方に渡して、出納していただいた革表紙の資料を、恐る恐る開いて閲覧したことを覚えています。あれから月日が経って、自身が古典資料センターで働くことになるとは、当時は思いも寄らぬことで、大変光栄に思うと同時に、当時私が提供していただいたサービスを、これからも必要とする方へ同じように提供していくことが求められていることを思うと、ただ身の引き締まる思いです。

私が初めて古典資料センターを訪問した頃と現在では、僅か10年ほどの間のことですが、資料と研究をめぐる状況も大きく変化しました。10数年前までは、資料を利用する＝紙媒体の利用であることは自明のことであり、デジタル化されたテキスト、画像をネット上で閲覧するという発想は、理系の一部の雑誌で実現しているに過ぎませんでした。今や世界の大学や研究機関の所蔵する貴重な資料は次々と電子化され、また電子ジャーナルの存在なしに現在の学問の進展を語ることはできません。古典資料センターでも、蔵書目録の電子化を嚆矢として、フランクリン文庫からフランス関係資料を画像公開するなどの試みを行っています。

こうした学術コミュニケーションの変容への対応が必要である一方、過去、幾世代にも渡って大切に守られてきた「ものとしての資料」を、これから先の世代に継承していくことも、古典資料センターの重大な責務です。多くの資料が電子データとして、いつでもどこでも簡単に利用することができるようになった今も、著者の思考の軌跡を窺わせるメモで埋め尽くされた草稿や、印刷技術誕生以前の華麗な手稿本など、資料そのものが放つ輝きは、いささかも色褪せるものではありません。7万冊余りの貴重書を有する図書館として、今後個々の具体例に即して、より良い保存と利用のあり方について模索していければと考えています。

微力ですが力を尽くしたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。